

## ジェームズ・ライト(James Wright)さんの長崎・桂川収容所跡地訪問

10月11日、12日、JICE（日本国際協力センター）の山口さんが万全の添乗してくださったライトさんの旅に同行させていただきました。長崎では爆心地とその周辺、また平和資料館内を、ガイドさんが英語で説明してくださり、パトリオットミサイル技者だったライトさんは、ガイドさんの説明に感謝して見送ったあと、“I've got a new perspective here.” 「私はここで新しい視点を得ました。」と静かにおっしゃったのが印象的でした。福岡では桂川町役場で古牧さんと「RKB 毎日放送」が迎え、2階に用意された部屋で、古牧さん、佐護さんと面会しました。佐護正憲さん(90歳)は戦後、朝鮮から復員し、平山炭鉱で働いた方。仲間から聞いた捕虜の話です、と断りをいれながら話し出しました。「みな体格が良く力があり、トロッコが線路を外れたとき、引き戻す道具をいつも腰につけていた。作業に協力して何の問題もなかった。しかし、彼らは決まった時間で働きたくて、日本人がここまでしてから昼食とか時間をずらすのは批判していた。」

また前日出た新聞記事を見た中島さんは、夫人の祖父が炭鉱夫だったので、北九州の炭鉱の本をプレゼントしてくださいました。この本には、1946年2月、当時、小倉に進駐していたライアン(Ryan)曹長がジープいっぱいの食料を積み、彼の炭鉱での捕虜時代にいつも弁当を分けてくれた炭鉱夫の藤原さんに会いに来て、二人で写った写真が掲載されています。

佐護さん、中島さん両人ともお話の内容が豊かで、時間のないのが惜しまれました。その後、収容所跡地に残るウィンチ(巻き上げ機)の跡を訪ねました。そこは今は車庫になっていました。桂川ではジェームズさんの父親が毎日見ている風景を地元の桂川町立図書館の保存写真などで確かめました。図書館でもこれからの資料交換など交流に大きな意欲を見せ、双方が出会いをお喜びでした。古牧さんの行動力と、暖かいお人柄が事前調査を大成功に導いたようで、提供された資料の大きなファイルがライトさんにプレゼントされました。

以上、感謝をこめて報告いたします。

(捕虜 日米の対話 東京代表 伊吹由歌子)

# ジェームス・ライト(James Wright)さん

## 桂川(福岡俘虜収容所第23分所)訪問記

### -----父親の足跡を尋ねて-----



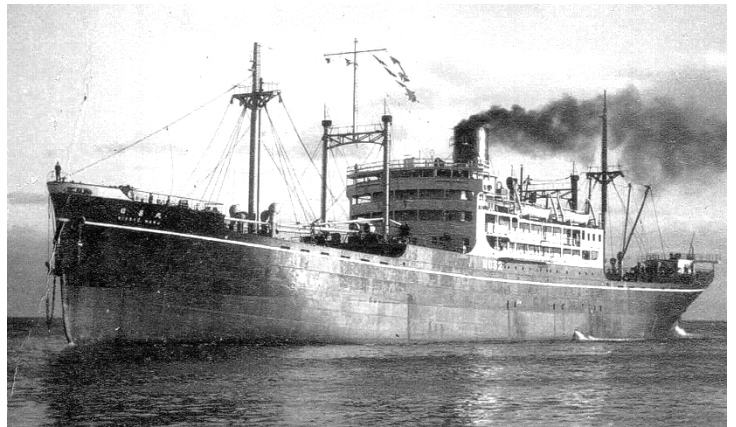
ジェームス・ライトさんと伊吹由歌子さん

ウィリアム・ライト (William Wright) さんのご子息ジェームズさんが何の目的で来日されたのかが分かったのは、彼が帰国してからのことです。

父親の恩人「家入荒雄さん」探しであったのか、収容所跡地を確認するためだったのかメディアのインタビューを受けている間も、唯一の収容所跡地での巻き上げ機の残骸を案内しても心ここにあらずということを感じたのは私だけではないでしょう。彼の目的が少し見えてきたのが、私に「空港まで来れるか？見せたいものがあるのだよ」といわれ福岡空港近くのファミリーレストランで彼の父親の戦友、カール・アレン (Carl Allen) さん

の写真を見せられた時です。1990年に自費で来日されたカールさんが数か所で撮られた写真を見せて頂きましたが、そこを見に行きたかったのではないかとその時は思いました。

帰国されて、16日、「ロジャー・マンセルのサイトは時々間違いがあるからね」と送って来たのが、正式なアメリカ人捕虜の氏名一覧、そして Carl Allen 氏撮影の写真 32 点というものでした。また南洋海運の貨客船、日昌丸に乗船後のマニラから門司港までの航海時に 4 人が亡くなり、いずれも水葬したことを書き留めた日記があることや、父親が書き残したメモもあり今後どのように整理していくかを考えているところだという内容でした。



日昌丸 (筆者提供)

確かに前日は長崎で“Ground ZERO”の地に足を運び、さらに原爆資料館にも足を延ばされた

と伺っていましたが、その多くはカール・アレンさんの写真を迎えるルートではなかったかと思います。カールさんは父親が最も親しくしていた戦友だったようで、2004年に亡くなられたときに 80mile (約 130 キロ) 離れたところでの葬儀に奥さんと二人で参加されたそうです。

ここまで読まれてお分かりだと思いますが、ジェームズさんはカールさんに自分の父親を重ね合わせるようにして、その足跡をたどる旅にしたかったのではないのでしょうか。そのことによって、75歳の若さで亡くなられた父親の面影、そして残された多くの資料を通して戦争に向き合うというテーマを自分自身に課されているような気がしてなりません。そこには単なるノスタルジアではなく真剣さが感じられます。それは私たち日本人に対しても向けられてもいます。3回目のメールの時、最後の行にさりげなく書いてありました。

「父親の体重はフィリピンでは 110k ほどだったが収容所では 48 キロまでになった。帰国直前の 9

月によやく 55k まで回復した。」そのことが戦後の父親の健康状態に影響を与えたことは間違いない  
 ということを暗にほめかしていると思います。また、日本軍兵士に対して Atrocity = 残虐行為という  
 言葉が使われています。強烈な投げかけです

ジェームズさんが見たかったであろうカールさんの桂川町での足跡を検証する作業が続きます。収容  
 所入り口の階段、炭鉱神社の狛犬、そして原爆きのご雲が見えたという目印の山並みの確認もしなけれ  
 ばなりません。



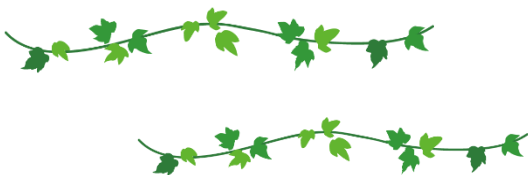
故佐護正憲氏

という言葉に少し救われています。このことはジェームズさんにはまだ知らせていません。

(古牧昭三)

今回も本当に多くの方々のご協力をいただきました。メディアの皆さん、桂川町立図書館のスタ  
 ップの皆さん、住民センター課長の尾園さん、家入荒雄さんの情報を寄せて頂きました 20 件を  
 超える多くの情報提供をして下さった皆さん、そして何より、90 歳というご高齢にもかかわらず  
 「遠くから来て頂くのですから少しでもお役に立てれば」と車イスで駆けつけ証言をして頂いた  
 佐護正憲さん、本当にありがとうございました。

佐護さんは 12 日後の 10 月 24 日 (水) に亡く  
 なられました。最後の力を振り絞っての証言では  
 なかったでしょうか。娘さんの「父も少しはお役  
 に立てたことでしょうか。私たちも誇りに思います。」



右 : James Wright さんの父、Willam  
 Wright さんの戦友、Harry Johnson さ  
 さんが帰国後に書いた福岡俘虜収容所第 23  
 分所のスケッチ

